都名所図会拾遺の後にしるす

春たつといふばかりに。霞たなびき。やふみわかぬ日影うらゝかに、夏は森の梢あをくしげり。秋は水底しろく暮ゆく空に。鴈金のつらねたる。冬は峯にさびしき松だにも。六花さきいで。春まちがほなるいつも面白し。山城の国はさらなり。山のたゞずまひのをゝしく。水の流のきよらなる。賤夫がもらす田はたさへも。うるはしきは。おのづからなり。いともかしこけれども。八方のもはらにして。四の神のさだめふさはしければ。宮柱ふとしきたて。幾万代も、たひらの都とたゝへまをせしは。いふべくもあらず。なにがしの院。くれがしの殿など。三葉四葉にとみさかえ。こなたの御社。かしこの寺など。又さらなり。はた名たかく聞えたる人の迹さへ。いとおほくて。むかししのばる。さればこゝだくかきあつめしふしたつものゝ。世にひろまりて。室ぬちにもみち。文車にもこぼれぬべし。しかはあれど画のごとしてふものから。今のうつゝのうつし絵のなきぞ。いとあたらしくなむ。おほけくも信繁嶺によぢ。水にたはぶる心もて。先師春汐斎の教のまにま。あまのもくづ書つめしもの六巻ありしを。真菅よし曾我部の大人の上達部にみせまつらせしかば。いとめでたまひて。はし書をさへ下したまひぬれば。その言だまのさちありて。やう〳〵世のもてあそび物となりて。もろこし人のみやこ帋たふとしといへるさまなり。今はたそのよろこびにたへずて。拾遺五巻をあらはし侍りぬ。すべて物のよく似かよへるは。画所のふかきいましめなれども。更にしもいとはず。雪の中に宮木ひく杣人のくるしきさま。夏川に簑も笠もとりあへぬ身のしぬゝにぬれし川長がすがたまで。もらさじたがへじといたづきなせしは。あそ

ぶに暇なき人の為に。いとゞみじかき筆のにほひもきえぬることを。はぢおもひけるといふことしかなり。

天明七年六月望日

浪速人春朝斎竹原信繁しるす